

作成日	2025 年 6 月 15 日
研究科名	生活造形学専攻

自己評価：S・**A**・B・C

評価項目① 過年度からの改善・向上の取り組み

- (ア) 昨年度の自己点検・評価において各組織で記述した課題・改善方策や、内部質保証推進会議からの提言を踏まえ、現時点における取り組み状況・成果について記載してください。
- (イ) 課程修了時に求められる学習成果の達成のために適切な指導・支援・フィードバック等を行い、それによって学生が意欲的に学習できているか。学生への指導や支援、成績評価やフィードバック等の取組状況を具体的に説明してください。また、期待した効果が得られているか、各種アンケート結果等をもとに検証のうえ、記載してください。

参照資料

- ・令和6年度自己点検評価シート
- ・令和6年度内部質保証推進会議からの提言
- ・第二期中期計画およびR7学長方針
- ・大学院生アンケート
- ・卒業時アンケート（大学院）
- ・資格取得や進路就職状況
- ・各種会議の議事録等

【現状分析】

(ア) 少人数制という利点を活かし密度の濃い教育と指導を行うと共に、外部からの多様な刺激（例えば実務家学外講師の特別講義など）を取り入れたアクティブラーニングを実施する一方で、少人数制であるため、異分野の多くの学生と意見交換する共通の場がまだ少ないと感じられる。そこでより多くの機会を設けるために新しい工夫をする必要があると認識し、以下のような対応策を実行してきた。

1) 従来の修士論文発表会などへの学生参加と意見交換に加え、令和6年度から、学生と教員がより多く参加する意見交換会を定期的に生活造形学専攻（学部の生活造形学科も含めて）で設定し、学科・専攻FD活動の重要なイベントとして位置づけることとした。またそこで得られた問題点と解決方法の提案は、専攻主任がまとめた上で、大学改革推進室に報告し、次年度への資料として活用できるようにした。

2) 家屋のリノベーション現場、古建築修復現場、日本庭園などの見学や、アパレル、デザイン、建築関係企業との連携プロジェクトなどを通して、外部の有識者や実務関係者と関わらせる機会を多くする工夫を行い、学生への体験型学習の強化を行った。

3) また、通常の授業においても「～特論」は他の分野の教員や学生と触れ合うことができる場であるため、興味のある特論は幅広く受講することを促した。

これらの効果はアンケートの結果として、「授業内容は期待していた通りであった＝大変当てはまる・50%、やや当てはまる50%、合計100%」であり、概ね良好といえる。しかし、より良い結果を得るために、授業内容を専門分野外の学生でもよりアプローチしやすい内容に今後更に工夫していく。

(イ) 学生の学習成果の把握・評価する目的や指標、方法については、シラバスの「授業の到達目標」、「授業の概要」、「授業計画」、「成績評価の方法」の項において明確に示している。特に学

習成果の段階的な評価項目を「授業計画」で明確に記し、学生にとってわかりやすく工夫している。学習成果は主に発表やレポートなどによるが、それらの評価方法についてもシラバス内に示している。評価は担当教員が厳正に行い、フィードバックしている。「学位授与の方針」についてもシラバス内に「学位授与の方針との関連」の項目を設け、明確に示している。

学習の具体的な方法については、学内 LAN よりアクセスできる大学院要覧の中に「研究指導計画」という項目を設け、修士（家政学）、修士（学術）それぞれについて模範となるスケジュールと達成すべき事項の要点を示している。学生と指導教員はこれを雛形とし、個々の研究テーマの性格や進度と調整しながら最適な学習方法の設定ができるようになっている。また、シラバスには、授業形態、授業形態詳細、副題、授業の到達目標、学位授与の方針との関連、授業の概要、15回の授業計画、授業時間外学習、課題に対するフィードバック、関連分野、教科書、参考書、学生へのメッセージ、当該科目に関連した実務経験の有無（担当教員の当該科目に関連した経歴、職歴、資格など）、成績評価の方法、復習の方法、PBL・ディスカッション・プレゼンテーションの実施についての項目があり、学生が受講するための情報を理解しやすく整理して説明している。

成績評価の方法はシラバスに、単位認定及び学位授与の手続・基準は大学院要覧に明確に示している。これは学生が自由にアクセスできる学内 LAN(京女ポータル)内のLMS (Learning Management System) で、直接授業担当教員と成績に関する質疑応答ができるようにしている。

例年在籍学生数が募集人員6名の2倍前後であるため、授業科目は集約的に整理した構成となっており、造形意匠学領域で22科目、アパレル造形学領域で18科目、空間造形学領域で20科目、共通領域で2科目である。よってほぼ全ての科目を主要科目と位置付ける。どの科目においてもシラバスにおいて、授業形態、授業の概要、授業計画詳細情報、到達目標、学位授与の方針との関連、授業時間外学習、関連分野、アクティブラーニングについて、成績評価の方法などを明確に示している。

修士論文の成果は、中間発表会、各領域内予備審査会および専攻内発表を経た上で研究科教員全員が参加する修士論文発表会を実施するという段階的かつ綿密な審査態勢のもとに可否が判断されるため、修士（家政学）または修士（学術）の学位授与のための評価は適正に行われている。また、これらの発表会には下級大学院生も参加し、自己のプレゼンテーションに対する研鑽を行っている。

生活造形学専攻では、上記のような教育研究上の目的に向けた事項だけではなく、実践的な技能・表現、豊かな人間性、総合的なコミュニケーション力を涵養するために様々な工夫をしている。まず、少人数教育を生かしたS/T比の非常に低い対面授業を基本とし、状況に応じてICTを活用した遠隔授業を提供している。対面と遠隔を同時に使うこともできる柔軟な態勢を整えている。S/T比の低さから、クラス分けをする必要はなく、個々の学生の事情に合わせて各教員が柔軟に対応できる体制を整えている。また、就職に対する支援も行なっている。

アンケートによると、

*「授業のレベルが適切であった＝大変当てはまる・62.5%、やや当てはまる・37.5%、合計100%」、

*「教員からの履修に関する説明が適切であった＝大変当てはまる・50%、やや当てはまる・50%、合計100%」

*「授業内容や評価方法を知る方法としてシラバスは役に立った＝大変当てはまる・50%、やや当てはまる・50%、合計100%」

*「教員の研究指導は適切であった＝大変当てはまる・75%、やや当てはまる・25%、合計100%」「課題などに対するフィードバックは効果的に行われていた＝大変当てはまる・62.5%、やや当てはまる・37.5%、合計100%」

*「教室や図書館の施設・設備は適切であった＝大変当てはまる・75%、やや当てはまる・25%、合計100%」

*「大学院研究室の設備は適切であった＝大変当てはまる・75%、やや当てはまる・25%、合計100%」⇨「最も多く使用する場所＝研究室87.5%」

*「就職支援について、大学院生向け求人等の情報提供及びキャリアセンターによる個人面接指導は十分であった＝大変当てはまる・100%」

*「受けた授業の成績評価が適正だと感じているか＝大いに当てはまる・100%」

*「どのような力が身についたと思うか＝豊かな人間性、幅広い視野、専攻分野に関する高度な専門知識を活用・応用する専門能力、専攻分野に関する高度な専門知識」

という結果が得られた。

これらの結果からみると、学習関連全てにおいて、「大変当てはまる+やや当てはまる」で100%となっているので、概ね良好といえる。

ICTを活用した授業に関しては、前回のアンケート結果ではあるが、「授業内容は期待していた通りであった＝大変当てはまる100%」、また「自分のペースで学習しやすい」、「自由な場所で授業を受けやすい」、「各種スケジュールの調整がしやすい」という回答が多く、一定の効果が得られている。また卒業時の満足度アンケート調査(大学院)では、「各授業人数の適切性」、「教授、先生の授業への取り組みに対する熱心さ」、「自分を成長させてくれる教授、先生との出会い」、「プレゼンテーション能力が身につく授業の多さ」、「自分で考える力が身につく授業の多さ」、「専門的な知識が身につく授業の多さ」、「幅広い知識・教養が身につけられる授業の多さ」がいずれも5段階中4以上であった。

本学大学院に入学する前に他の大学院で履修した授業科目については、教育上有益と認められる場合、本学の大学院における授業科目の履修により修得したものとみなすことができるとし、また、優れた業績を上げたと認められた者については、在学期間を1年に短縮できる制度を設けている。

学位授与の方針及び学位記の形式などは、大学院要覧の「京都女子大学学位規程」に示されており、毎年規程通りに授与されている。また手続きや授与の体制は同要覧の「京都女子大学大学院学位論文の取り扱いに関する内規」に示されており、適切に実施されている。

大学院における前年度の自己点検は学期初めに毎年行われた。評価項目は「1. 毎年度の向上・改善施策の実施状況(成果・課題・継続事項)はどのような状況か」、「2. 定員充足の状況はどのような状況か」、「3. DP・CPと関連したカリキュラムが適切に設計されているか」、「4. DPに沿って設定された各学位プログラムについて、適切に実施されているか」、「5. 学修成果の到達度の把握はどのように行っているか」、「6. 各科目の成績および論文・研究が適切に評価されているか」、「7. 職位構成・年齢構成のバランス、非常勤比率に留意し、かつカリキュラムに基づく教員組織となっているか」、「8. 課題認識および外部環境を踏まえた独自のFD活動を実施」で

きているか」、「9. 上記以外で『継続すること』『課題』『次へのアクション』『全学レベルで検討すべき事項（提案）』といった項目が設けられ、データ、点検結果、課題、改善へのアクションの分析・報告が求められ、専攻主任が担当し、適正に実行している。

資格登録者数に関しては大学側で調査し、HP の在学生向け就職データに学科・専攻別に示している。これにより、教員、学生ともに現状を把握し、次年度の目標設定などに活用している。

以上から判断して、生活造形学専攻が目指す適切な指導がなされていると判断できる。

【成果】

学生の視点を取り入れたFDに関し、少人数教育であることを活かし、各ゼミ内の勉強会や意見交換会において個々に対応するほか、論文発表会参加時の質疑応答によって密度の高い実践ができた。またこれらの論文発表会には外部有識者の参加を促進し、大学内だけに止まらない意見交換がなされた。また、各ゼミや授業では見学会や企業とのプロジェクトなどを通して活発な交流が行われた。

これらのことを通して、学生や教員への学際的な良い刺激となった。

【課題】

1) 学部の時間割との調整上、どうしても遅い時間帯になる授業がある。

2) アンケートによると、「教務課から大学院生への連絡・説明が適切であった」=あまり当てはまらない・62.5%であり、改善の必要がある。

3) アンケートによると、「京女ポータル（学内LAN）で大学院生に対する情報や連絡を適切に得ることが出来た」=あまり当てはまらない・50%であり、改善が必要である。

4) 自由記述アンケートによると、「大学院での研究や制作活動において、Adobe 製品やVectorworks などのソフトを使う機会が多くあるが、院生が自由に使える環境が現在乏しい」という意見があった。

【改善・発展方策】

1) 少人数制を活かして学生と教員の間で必要時間数を確保しながら柔軟に調整していく。

2) 教務課においても非常に煩雑な作業であり、なかなか完璧は困難なので、各ゼミにおいて教務課との連絡をより密にし、サポートしていく。

3) 使いにくい点を授業や学生を交えたFDなどにおいて抽出し、各課と連携しながら改善していく。

4) 今後、大学院の予算割り当てとの関係を考慮し、ソフト面での援助を強化していく。